

◆ 今週のコメント

- ・ カルバペネム耐性腸内細菌感染症の報告が2例(共に女性, 20歳代, 80歳代)あります。平成26年9月から五類感染症(全数把握感染症)に追加されて以降, 累積報告数は5例となっています。
- ・ 侵襲性肺炎球菌感染症の報告が1例(女性, 60歳代)あります。平成25年4月に五類感染症に追加されて以降, 昨年は15例の報告があり, 本年の累積報告数はすでに32例にのぼっています。5歳未満の小児と60歳以上の高齢者に多く発症しており, 年間を通じて注意が必要な疾患のため, ワクチンによる予防が重要となります。なお, 平成26年10月1日から, 高齢者を対象とした肺炎球菌ワクチンが定期接種となりました。詳細は下記ホームページをご覧ください。
○高齢者肺炎球菌ワクチンの定期的予防接種について
<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000171591.html>
- ・ 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は, 7.02(288例)で先週5.39(221例)に比べ増加しています。例年11月頃から, ノロウイルスを原因とする感染性胃腸炎の患者報告数が急激に増加し, 12月の中旬頃にピークとなる傾向があります。流水と石鹸による手洗いやうがいの励行等, 予防対策に努めてください。

◆ 今週のトピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は0.19(13例)で, 前週 0.04(3例)より増加しています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 二類:結核 9例(肺結核 4例, その他結核 2例, 潜在性結核感染者 3例)うち喀痰塗抹陽性 1例
- ・ 三類:腸管出血性大腸菌感染症 1例(第45週追加)【1月以降の累積報告数 31例】
- ・ 五類:カルバペネム耐性腸内細菌感染症 2例【1月以降の累積報告数 5例】
- ・ 五類:侵襲性肺炎球菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 32例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

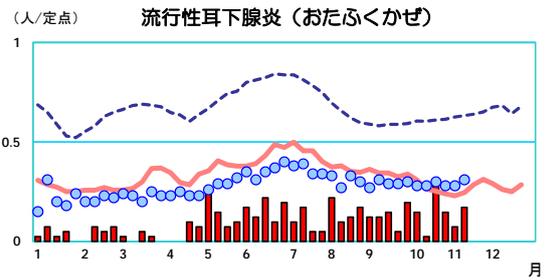
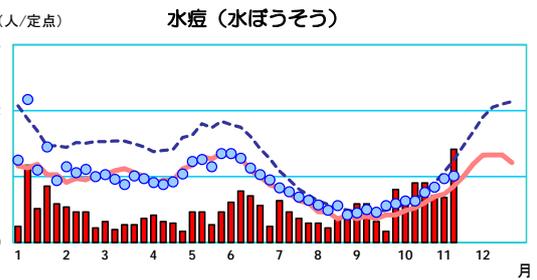
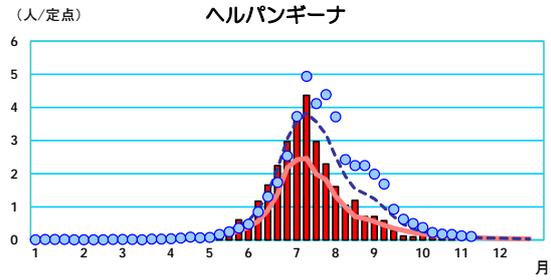
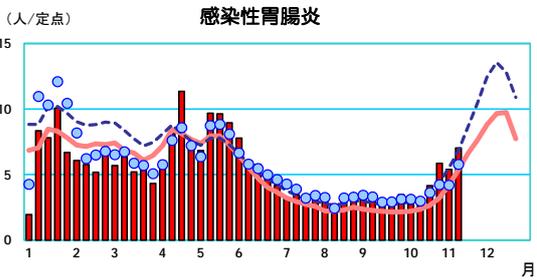
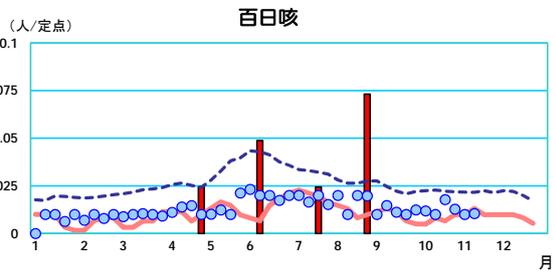
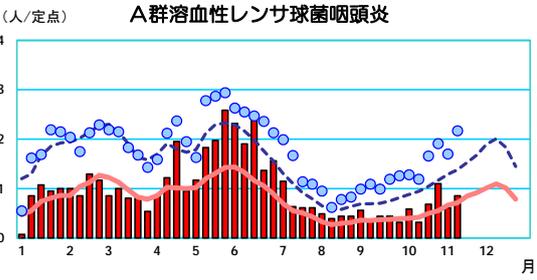
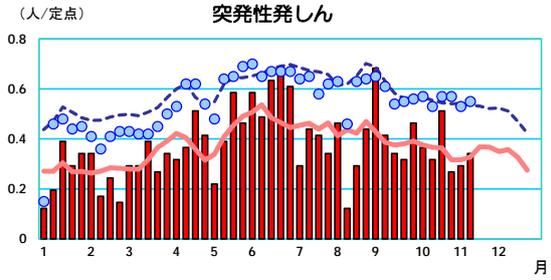
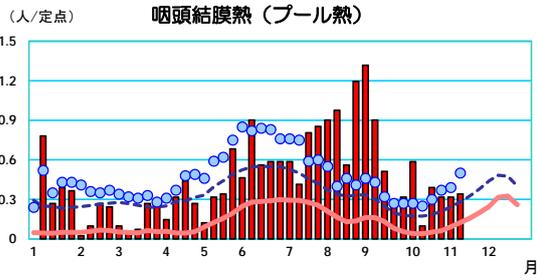
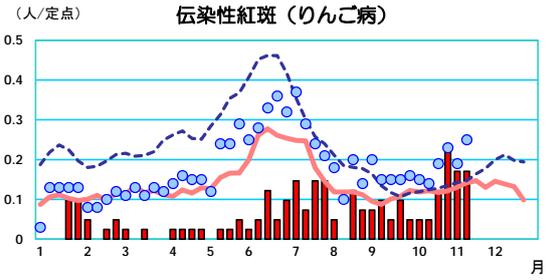
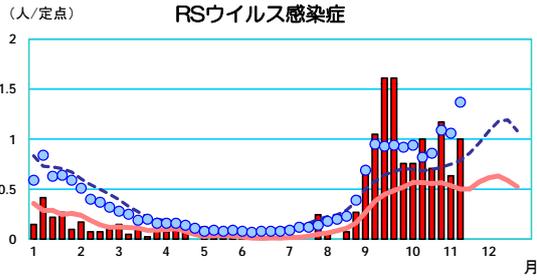
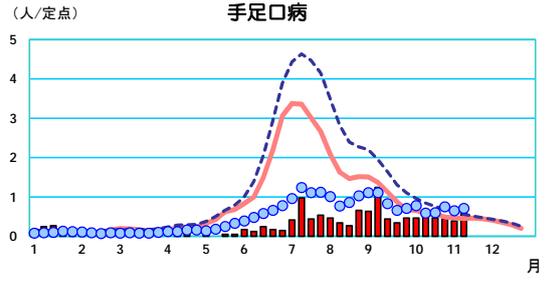
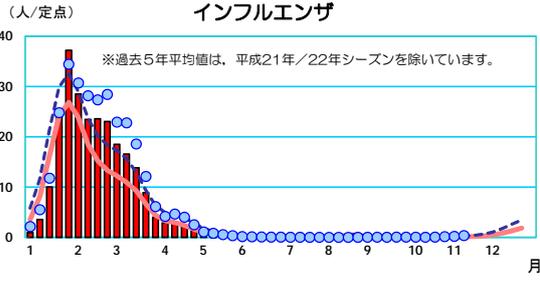
定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ ^a	インフルエンザ	0.19	13
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	7.02	288
	② 水痘	1.41	58
	③ RSウイルス感染症	1.00	41
	④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.85	35
	⑤ 手足口病	0.66	27
眼科	流行性角結膜炎	0.50	5

【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <インフルエンザ>

(注)京都市のデータは, 平成26年11月20日現在の報告数で, 全国の還元データと若干異なる場合があります。
また, 本情報での患者数は, 届出医療機関所在地での集計で, 患者の住所を示すものではありません。

インフルエンザ及び小児感染症の疾病別推移グラフ（平成26年）



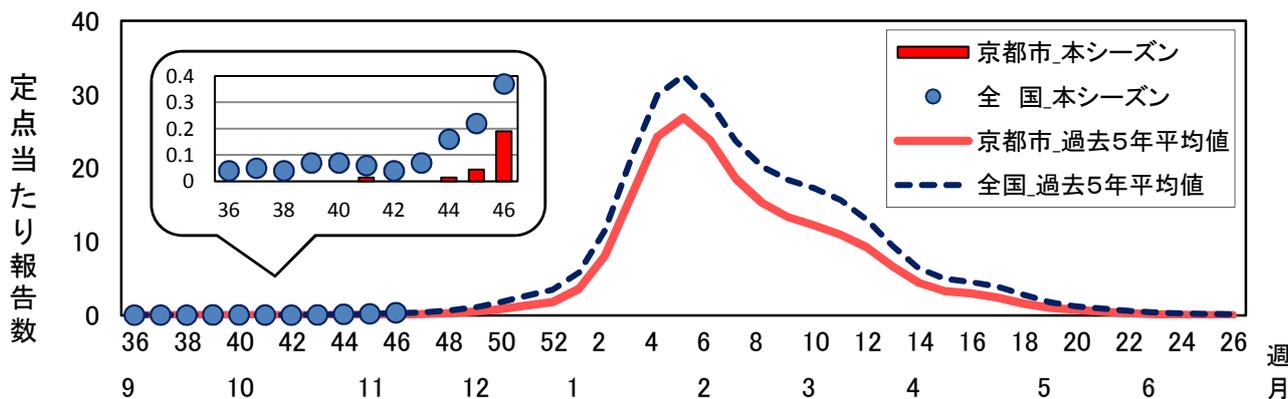
第46週(11月10日～11月16日)トピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は0.19(13例)で、前週 0.04(3例)より増加しています。都道府県別では、35都道府県で前週より増加しており、近畿6府県でも増加しています。

感染症情報センターに報告された全国のインフルエンザウイルス分離・検出報告状況(11月21日現在)によると、今シーズンはA(H3)型が約86%を占めています。

インフルエンザは、例年、12月～3月頃に流行します。インフルエンザの予防のポイントは、「手洗い」、「咳エチケット」、「ワクチン接種」です。ワクチン接種には、重症化を防ぐ効果があります。インフルエンザワクチンの効果を得るには、接種してから2週間程度の期間が必要ですので、早めの予防接種が推奨されます。インフルエンザワクチンは、そのシーズンに流行するインフルエンザウイルスの「型」を予測して作られており、約5箇月間しか効果が持続しないため、毎年接種する必要があります。流行前のこの時期にワクチン接種を済ませましょう。

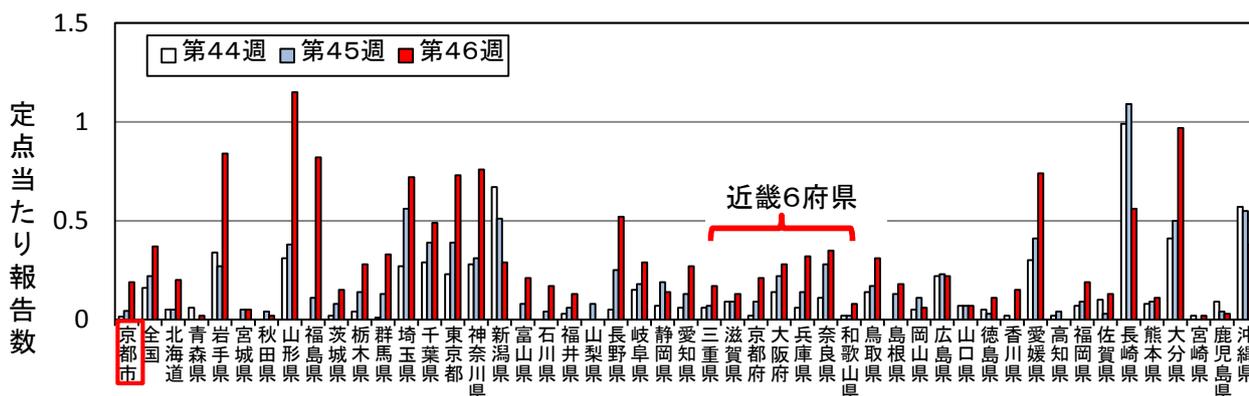
本市及び全国の定点当たり報告数の推移



※平成21年/22年シーズンは、インフルエンザ(H1N1)2009の影響で、例年と流行傾向が大きく異なるため、過去5年平均値の算出には使用していません。

注)先般、2009年に大流行したインフルエンザはインフルエンザ(H1N1)2009とすることが決められています(厚生労働省)。また、その原因ウイルスについてはWHOはA(H1N1)pdm09と記載することを勧めていますが、国立感染症研究所ではN型の型別判定をしていないときはAH1pdm09と略記しています。

都道府県別定点当たり報告数の推移



全国のインフルエンザウイルス分離・検出数(11月21日現在)

